

助け合いを考える

60のヒント

住民流福祉総合研究所 (木原孝久)

350-0451 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷1476-1

電話 049-294-8284

ホームページ <http://juminryu.web.fc2.com/>

はじめに

本書は、「助け合い」を考えるときのヒントを提供しようというものである。助け合いとは何なのか、なぜ助け合いは難しいのか、どうしたら助け合いができるのかなどに考えをめぐらしたり、議論する場合に、参考になりそうな事実や考え方などを60項目、並べてある。



「助け合い」という言葉は、あまりに長い間、気軽に使われ続けているので、私たちにとって「空気」のような存在になっている。特別抵抗も感じないが、「本当にそうだ!」といった感動もなくなっている。



ところがこの「助け合い」、なかなかの曲者である。助け合いをしましょうと気軽に言い合っているのに、ではだれが本当に助け合いをしているかと言えば、あまりいない。私も福祉の世界に入って40年になるが、その間いつも「助け合い」と言っていた気がする。そのこと自体、みんな「助け合い」と言いながら、じつは助け合いの社会はまだできていない証拠なのだ。



助け合いが難しい理由の最たるものは、助けることは容易だが、助けられることが至難の業だからだ。誰もが助け合いと言いながら、考えているのは、自分が相手を助けることで、自分が相手に助けってもらうことではない。他人に助けてもらわねばならない自分を想像するのも気が重い。そう思っているのではないか。



助け合いにまつわる人間の「心理」は複雑怪奇であり、論じる値打ちは十分ある。まずそれを解き明かし、その上で、助け合いを阻んでいるものを一つ一つ除去していかない限り、ほんとうの助け合い社会は到来しない。

本書をタネにして、仲間内や公開の場などで、改めて助け合いについて考えてみたらいかがだろうか。どこから入っても結構。つまみ食いでも結構。もし61番目が見つかったら、これに追加するので、ご連絡いただきたい。

目次

- (1)「助けて！」が言えない／4
- (2)「両刀遣い」で免許皆伝／8
- (3)担い手と受け手の協働作業／10
- (4)助けられ上手になるために／12
- (5)助け合いが始まり易い環境／15
- (6)ご近所での助け合いの流儀／16
- (7)助け合いはしない「おつき合い」／23
- (8)サービスと助け合いは対極に／26

(1) 「助けて！」が言えない

「助け」はすぐにできるが、「助けられ」は本当に難しい。なぜか？

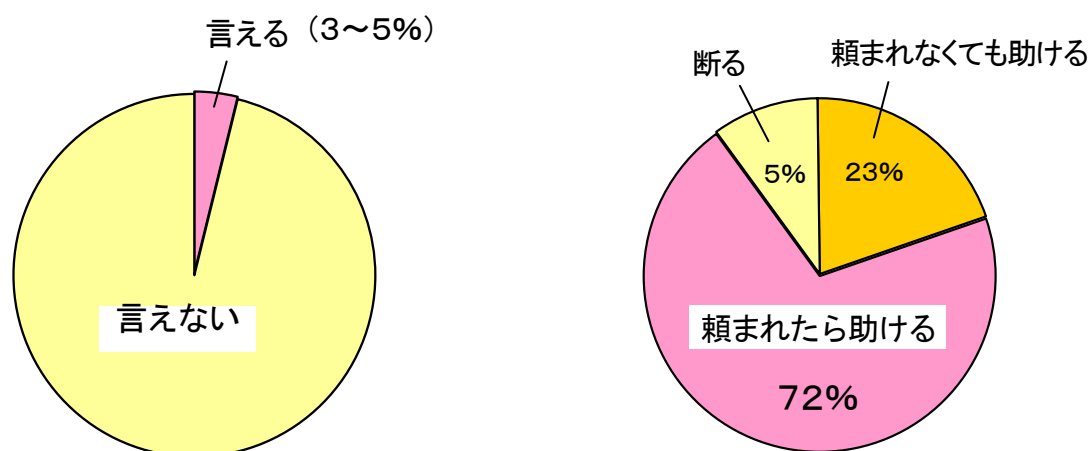
①「助け合い」は、正確には「助け合い」でなく「助け」の意味に使われている。誰も「助けられ」の方は考えていない。

例えば有償の家事援助サービスグループにその理念を聞くと「助け合い」と答える。「ではあなたは、仲間に助けってもらったことがあるか？」と聞くと、「ないけど、いずれ要介護になったら助けてもらいますよ」と言う。

グループ創始から数十年も経過した有償サービス・グループのリーダーに聞いてみた。長い間協力会員だった人で、その後要介護になり、亡くなった人はいるか。数名はいた。その人たちは、亡くなる前に仲間に助けを求めていたかと尋ねたら、1人もいなかった。やっぱり「助けて！」は言えなかった。

②助け合いが始まらない理由は、「助けて！」と言える人がいないからだった。

長野県須坂市でこんな市民向け調査を実施した。「あなたは困った人がいたらどうしますか？」選択肢は3つ。①は「頼まれなくても助ける」。②は「頼まれたら



困ったとき「助けて！」と言えるか？

助ける」。③は「断る」。結果は①23%。②72%。③5%。95%もの人が「困った人がいたら助ける」と言っているのに、なぜ助け合いが始まらないのか。他方、講演会などで参加者に「困った時、助けを求められる人は？」と聞くと、「助けて！」と言えると答えるのは、きまって3～5%。大部分の人が言えないのだ。これでは「頼まれたら助ける」という72%が手を出せない。頼む人がいないのだから。

だから、助け合いのまちをつくるには、私たちがどうすれば「助けて！」と言えるようになるかが課題になる。

③自分が助けられる側にもなりうることを、どうしても受け止められない人がいる。

助けられ上手講座で、助けられの意義やそのテクニック等を1時間も説いた後に感想文を書いてもらおうと、「私はこれからもがんばってボランティアを続けていきたい」と書く人が一定パーセントいる。これだけ「助けられ」を説かれても、自分が助けられる立場になるということは、やっぱり意識の中から排除したいということなのか。

④誰でも、自分は問題を抱えていないという顔をしたがる。

また、自分が問題を抱えていることは、他人ほどには気づかないものだ。その問題が深刻なほど、それを意識の奥に押し込めようとする。みんながそうしているうちは、助け合いは始まりようがない。

⑤助けを求める前に、自分の抱えている問題をオープンにしなければならぬ。それができない。

講演会場で、自分や家族の抱えている問題をオープンにできるかと聞いてみる。できるという人は、大体全体の10～15%程度だ。これでは助け合いは始まりようがない。助け合いはしたいというが、その前提として、自分の問題をオープンにできるかと聞くと、できないというのだから。

⑥自分の問題をオープンにするのは勇気が要るが、まわりの誰かが先鞭を切ってオープンにすれば、みんながそれに倣う。

町内会役員の北川さんは、母親の徘徊が激しくなり、困り切っていた。町内会長の藤野さんが、それなら思い切ってお母さんの写真などをチラシにしてオープンにしようと提案。2人で町内を配り歩いたら、「じつはうちの家族も…」と10人が名乗りをあげたので、藤野さんはビックリ。

もともと認知症を隠す必要はないのだから、誰かがオープンにすれば、みんながこれに倣うはずなのだ。

⑦助けを求めることは、自分の弱味をさらけ出すことである。それができるか。

助けられ上手講座で講義をした後の議論の中で、こう言う人がいた。「私が『助けて!』と言えないわけが分かりました。助けを求めることは、自分の弱味をさらけ出すことだったんですね」。これに対して、助けられ上手さんは別の言い方をする。「私の弱味を知っていただく」と。弱味をネガティブに捉えるか、ポジティブに捉えるかの違いだった。

たしかに助けを求めることは、自分の問題を自分一人では解決できないと認めることだ。それは仕方がないことだと開き直れるか、やはり自覚したくないと思うかの違いだ。

⑧助けを求めることは、相手に面倒（迷惑）をかけることである。それができるか。

助けてくれということは、自分のできないことを相手にやってもらうことである。当然相手には手間や時間がかかるし、面倒だとも感じるだろう。「面倒かけますけど、すみませんねえ」と言えるか。

他の国では、それもお互い様と考えるのだが、日本人は、人に迷惑をかけることに極端に神経質になる。親から誰もが言われているのは、「何をしてもいいけど、

人様に迷惑をかけることだけはしないでおくれよ」だろう。その掟を破ることなのだから。

⑨これだけ「助け合い」が求められ、「助け合い」の言葉が氾濫しているのに、結局、だれも自分が助けられる側になることは考えていない。

「助け合いをどう思いますか？」と聞くと、大抵は「大賛成」と答える。その後でこう付け加える。「困っている人がいたら、助けてあげます」と。逆に「私が困ったら助けてもらいます」と言う人には会ったためしがない。

⑩ふれあいをしていればいずれ絆が強まるというのは誤り。ふれあいをするだけでは、いつまでたってもふれあいにすぎない。そこで誰かが「助けて！」と仕掛ければ、そこから助け合いが始まり、絆が強まる。

これも大きな錯覚の一つで、ふれあいをしていれば、いずれは助け合いに発展し、絆が強まると、淡い期待をしている人が少なくない。しかしこれは間違いだ。助け合いに発展するかどうかは、誰かがこれを仕掛けねばならない。手っ取り早くは、「誰か助けて！」と言うことから始まる。

こんな話がある。同じ会社で働く2人の女性。子どもを同じ保育園に預けている。早く引けた人が相手の子どもも預かって帰るということにしていた。ところがある日、1人の残業が長引き、とうとう10時過ぎになってしまった。申し訳ない気持ちで相手の家を訪れたら、「子どもはもうお風呂に入れ、ご飯を食べさせて、寝かせてあるから、今日はうちに泊めましょう。あなたもお腹が減っているでしょうから、食べていきなさいよ」。有難くて涙が出そうになったという。彼女はこう言っていた。「それまでは私たちはただの同僚でしたが、今度のことがあってから、友達になりました」。

(2) 「両刀遣い」で免許皆伝

「助け」と「助けられ」は分業するものではなく、各自が両方を体験しなければならないのだ。

①自分も助けてもらってみなければ、わからないことがある。

「助け合い」をグループ名に冠した家事援助サービスグループ。そのリーダーに聞いてみた。「助け合いということは、あなたも仲間に助けってもらっているんですよ」。そうだと言う。「私のグループでは、リーダーたちは皆、助けってもらうことという不文律がある」とも。それは素晴らしい。ではあなたも助けもらったことがあるのかと聞くと、仲間のAさんに来てもらって、部屋の掃除と、母の生活支援をお願いしたという。「彼女、うちに来ると、部屋を見渡してこう言うのよ。『まあ、あなたのうちって意外に散らかってるのね』」。これにはカチンときた。散らかってるから来てもらったんだから、何もあからさまにそう言うことないじゃないのと。

ところが彼女、「カチンときた」時に思い出したことがある。彼女自身、他の家へ行ったとき、同じことを言っていたのだ。その後彼女は、活動に出かけた先で、これを言うまいと心に決めた。

②助けってもらう体験を積むほど、その成果が助けの知恵として積み重なっていく。

助けってもらう中で、活動者からの一言でカチンと来た。私はそれを言うまいと心に決めたことで、それだけ助けの技術が高まった。助けってもらうほど、助けの技術も高まっていく、という関係になっている。

言い換えると、助けられの体験がない人は、何十年活動者として活躍していても、助けの技術はあまり進歩していないとも考えられる。助けの技術の錬磨は、助け活動にあるというよりも、助けられの体験にあるというわけだ。

③同様に、人を助けてみなければわからないことがある。

今の話の裏返しのような話がある。障害者が自立生活をするために、複数のボランティアを活用しているケース。そのボランティアの1人から愚痴を聞かされた。自分が担当している障害者がわがままで、無茶苦茶な人の使い方をする。そのために私以外のボランティアは全部去ってしまった。私もやめようかしらと。

もしかしたらその障害者は、誰かを助ける体験を積んでいないので、助ける側の気持ちがわからないのかもしれない。まさに両刀遣いで免許皆伝なのだ。

④世話焼きさんと言われる人は、助けられ上手でもある。両方のベテランなのだ。

世話焼きさんの活動を聞いていると、助けたり助けられたり、その両方が折り重なっているように見える。どこからどこまでが「助け」行為で、どこからどこまでが「助けられ」行為だという線引きができないのだ。本人の頭の中でも明確には区分けしていないのではないか。これが本当の助け合いなのかもしれない。

(3)担い手と受け手の協働作業

福祉というのは助ける側と助けられる側の協働作業だった。助けられるのも立派な福祉活動。

①助けられ行為も「福祉」活動の一つと考えたら？

長野県須坂市では福祉大会で、助けられ上手さんも表彰している。なぜか？表彰状にはこう書かかれている。「助け合い推進貢献賞」。どういうことなのか。福祉とは人を助けることだけでなく、助けてもらう側も立派な福祉活動だと理解するのだ。

例えば民生委員が活動に苦慮している時は大抵、引きこもっていて民生委員が訪れてもドアを開けないなど、助けられる側のあり方が原因になっている。反対に訪問相手が快く受け入れてくれれば、本当に活動がしやすい。こう考えると、やはり福祉というのは、助ける側と助けられる側が協力し合うことではじめて、うまくいくのだ。

②助けられる側も助け合いの一方の主体者だとすれば、もっと責任を求めていい。

助け合いは両者の協働作業だということは、両方に平等の責任があるということだ。だからもし助けられ下手さんがいて、受け手として果たすべき役割を怠っているなら、助ける側ばかりが一方的に奮闘するのではなく、相手にも努力を促していいはずだ。ところが担い手はそうしない。これは、「助けられ行為」の意義を評価していない証拠と言える。

③活動に際して、担い手と受け手は平等の立場で「活動」の協議をすべきである。助けられ方についても一緒に議論していい。

今までは活動と言えば担い手の行為と決まっていたから、活動のための協議とか評価は、担い手だけで行う。しかし、もしここで述べているように、担い手と

受け手の協働作業だとしたら、活動のあり方やその評価は両者で一緒にすべきである。担い手のあり方だけでなく、助けられる側のあり方も率直に評価し合ったらどうか。そうすることで、助けられる側の意識も高まるし、助けられ行為についての自覚も強まる。

④もともと福祉は困った人が助けを求めることから始まるのだ。言い換えれば、福祉の主役は助けられる側の人だった。助けを求めるのは「主役としての行為」のいっかんで、それを恥じることはないのだ。

地域で人々の助け合いの状況を調べてみると、意外なことが見えてくる。例えば要介護の夫婦が、どのように助けてもらいたいのか、周りの人に上手に指示していた。「あなたはゴミ出しをお願い」「あなたは私を車で運んでね」と。送迎の場合はタダではいけないと、若干の有償でお願いしていた。むろん「すみませんね」とは言うだろうが、福祉の営みの主役は私なのだという意識がある。

そういえば英語に「セルフケアマネジメント」という言葉がある。自分のケアのマネジメントを自分でする。そのマネジメント行為の一つに、助けを求めることがあるのだ。

(4)助けられ上手になるために

助けられ上手になれるために、どんな努力をしたらいいか。人々はどんな努力をしているかを、以下に並べてみた。

①自分に向けられた善意は素直に受け入れる。

ある地域で開いた「助けられ上手講座」で、参加者にグループ作業をしてもらった。「どうしたら助けられ上手になれるのか?」。すると、まだ上手にはなれないけど、この程度ならできないこともない—という2つのアイデアが出てきた。

①善意を断らない。②「それ、苦手なんだ」と言う。

いずれも消極的な「助けられ」行為だ。「助けて!」とは言えないが、差し出された善意は断らない。まずはここから始めたらどうか、ということである。②は、問題を解決できなくて困っているということを示唆する程度ならできる、というわけだ。これが入門編。

②助けられたら「すみません」ではなく「ありがとう」と言う。

私たちは、いただいた善意に「すみません」と言う癖ができています。しかし助けってもらうことを申し訳なく思うのではなく、相手からの善意をありがたく受け取ることが助け合いの第一歩。「すみません」ではなく「ありがとう」と感謝の意を表そう。助けられ上手はこの「ありがとう」が素直に出てくるかどうか、が問われるのだ。

③自宅に他人を入れることに抵抗はない。

困り事を解決してもらうには、場合によっては、家の中に入ってもらわねばならない。家の中に入れば、困り事は見える。それを見られることを嫌がっているのは仕方がない。というわけで、助けってもらうには、家を開放することも大切だ。

④「息子が精神障害」「夫が認知症」と言える。

自分が抱えている問題をまわりにオープンにすることができるかを問うている。普通は自分が抱える問題は隠すものだが、それではだれも助けてくれない。むしろ積極的にアピールしていく。そうすることで、あの人は助けてもらいたがっているということが周りに伝わるのだ。

⑤さびしい時は「さびしい！」と声をあげられる。

人の善意に素直に身を委ねられる人は、こういうことができる。今の自分の困った心情をそのまま表現できる人には、善意が向けられやすいのではないか。「助けてあげたい」という気持ちになるのだ。

⑥気軽に「助けて！」と言える相手を1人は見つけてある。

誰にでも「助けて！」とは言えないが、1人か2人、言える相手を見つけるのならできるだろう。

足元の5人の一人暮らし女性の面倒を見ている男性。たいそうな世話焼きさんだが、5人が共にこの男性を見込んで、何でも頼んでいた。除雪や買い物代行だけでなく、重い物の上げ下ろし、貯金の払い戻しなど。この1人の男性を見つけただけで、女性たちの困り事はほとんど解決してしまったのだ。

⑦いざという時、頼りになる世話焼きさんが足元にいる。

世話焼きさんは、人の好き嫌いが少ないので、誰でも助けてあげようとする。だからこの人を1人見つけてあれば、いざというとき安心だ。

⑧今のうちに人に尽くしておこうと活躍している。

認知症で一人暮らしの女性に、周りの相当数の人が関わっていた。なぜなのか。その人たちに聞いてみると、彼女には以前お世話になったという。そして認知症になった今でも、彼女は世話焼きを続けているという。「みんな彼女の家を訪れていますが、特に男性などは、今でも世話を焼かれていますよ」。

元滑川市社協会長の山下節子さんは一人暮らしだが、仲間とビーチボールの会

を立ち上げ、終了後、毎日メンバーを自宅に招いてごちそうをしている。一体何のために？「私が要介護になったら助けてね」のメッセージだ。グループの中にはヘルパーやケアマネ、民生委員などもいる。用意は万全だ。「助けられ上手さん」は「備え上手さん」でもあった。

⑨助け合いを目的としたグループに加入している。

千葉県のある有償サービスグループは、メンバーが自分のご近所でも助け合いをしていた。要介護の妻を介護している男性メンバーをこの団地内の仲間が（ボランティアで）支援しているし、一人暮らしのメンバーも仲間が連携して見守っている。ご近所に戻ってからも助け合いができる—こういうグループに入っておくと必ず助けてもらえるからいい。

ボランティアグループでも、仲間同士の助け合いはしないという所もあるから、それを確かめる必要がある。

⑩サロンや趣味グループ、ボランティアグループ、老人会などで助け合いを仕掛けている

助け合いのグループがない場合は、自分で作るより仕方がない。埼玉県在住のA子さんは、見事にこれを実践した。

- ①ご近所とおすそわけをし合う仲になり、簡単な助け合いもできるようになった。
- ②自宅開放でサロンを開き、これもいずれ助け合えるように仕掛けている。
- ③配食グループのリーダーになり、メンバーが困ったときは助け合える仲になった。
- ④スイミングクラブも同様。
- ⑤老人ホームのボランティアをし、いざという時は入所できるようお願いした。
- ⑥裁縫教室を何十年も続け、500名もの教え子を育てた。「先生に何かあったら飛んでいくからね」と言ってくれる。
- ⑦足元の親戚も頼りになる。

こういう働きかけをしないと、日本のグループは助け合いをしようとはしない。助け合いの慣例のないグループだったら、思い切ってこちらから仕掛けていくより仕方がない。

(5)助け合いが始まりやすい環境

助けられ下手な人でも、その環境にいれば自然に助けてもらえる—といった場ができればいい。

①あけっぴろげな関係のご近所では、自然発生的に助け合いが始まってしまう。

そこでは、メンバーが抱えている問題も皆に見えてしまうし、そこに世話焼きさんも混じっているから、本人がぼやぼやしている間に助けの手が伸びてしまう。

②助けられ上手さんが1人いると、その界隈で助け合いが始まる。

助けられ上手さんが1人いて、その腕を存分に発揮すると、それに誘われるようにその界隈全体で助け合いが始まっていく。大事なのは助けられ上手さんがリード役を果たすこと。

③助け上手と助けられ上手が揃うと、その界隈で助け合いがスムーズに始まる。

助け合いが始まる基本的な構図は、その界隈にこの2人が揃うこと。その場合も、リード役は助けられ上手さんだ。

④同じ境遇の人が近くにいると、容易に助け合いが始まる。

例えば一人暮らしの高齢者、特に女性の家が数軒かたまっていると、自然に助け合いが始まる。同じ問題を抱えている人同士は、自分の問題を隠す必要がないから、一挙に助け合いが進んでいく。

(6)ご近所での助け合いの流儀

ご近所は助け合いにベストな環境だ。ここで最高の助け合いができる。

①助け合いは小さな集落一向こう三軒から30世帯程度の範囲内で最も盛んにおこなわれている。町内単位だと助け合いは難しい。

私たちは気軽に、助け合いのまちをつくろうと言っているが、実際に助け合いができるのは、ごく小さな範囲なのだ。いわゆる「顔が見える範囲」とは、向こう三軒から班・組、もっと広くは30世帯程度までが限度だ。そこが助け合いの最適圏域。

②ご近所での助け合いは、支え合いマップづくりをするとよく見える。ただ漠然と見ても見えない。住民は見えないように助け合っているからだ。

支え合いマップとは、①の「ご近所」（平均50世帯）ごとに、そのご近所内の住民数名に集まってもらって、「気になる人」や、その人に誰が関わっているかなどを調べ、それを住宅地図にのせていく。これで住民の助け合いの実態や、世話焼きさんなどの人材、ご近所が抱える問題などが浮かび上がってくる。

ただ何となくご近所を見ても、何も見えない。後述するように、ご近所では、助け合いは水面下ですするという暗黙のルールがあるからだ。

③要援護者はこのご近所に住んでいて、ここで自立した生活を送りたいと言っている。そのためにご近所での助け合いに大いに期待している。

関係者は主に市町村域や校区で活動しているが、要援護者はご近所に住んでいて、その心身の状態ゆえに、そこから出ることが困難だ。町内圏域でいろいろ活動が行われていても、参加できない。だからこそ、ご近所で助け合いが盛んに行

われことを切に願っているのだ。

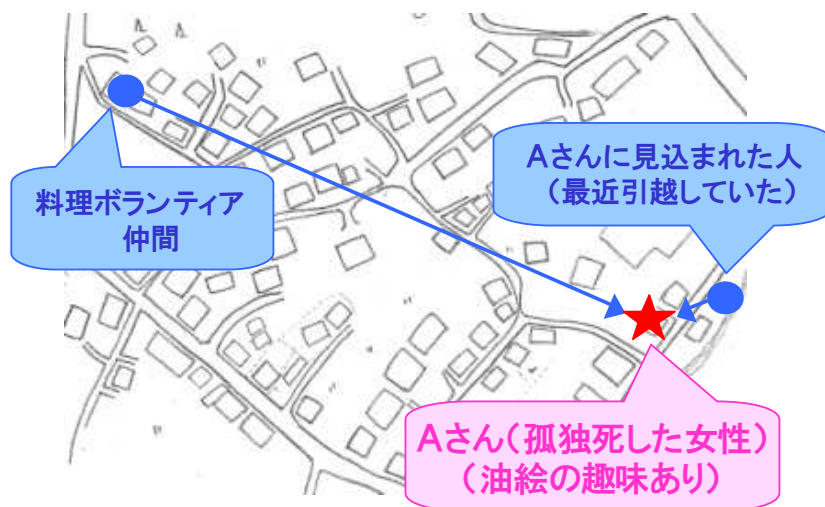
④ご近所では要援護者が積極的に助け手を掘り起こし、上手に活用している。ご近所では当事者が主役になっているのだ。

ご近所は小さな圏域だから、要援護の人でも、足元からいろいろな助け手を掘り起こすことができる。普段は気付かないけれど、マップを作ると、そんな助けられ上手の要援護者がたくさんいることに気づくはずだ。

⑤引きこもりの、一見「助けられ下手さん」も、丁寧に調べると、ご近所内から2人ぐらいの助け手を掘り起こしている。

マップを作ると、必ずご近所毎に1人か2人、引きこもりの人が見つかる。住民は、その人とはだれも関わっていないと断言するが、よく探してみると、大抵は2人ぐらいの人を見込んでいる。ご近所の良さは、そういう所にあるのだ。

マップづくりで、死後2週間で発見された一人暮らし女性がいた。住民に聞くと、初めは、彼女は誰とも関わっていなかったからそうなったということだったが、じつは2人の人を見込んでいたことが分かった。特に、斜向かいの家の人には「何かあったらよろしくね」と言っていたという。ではなぜこういう結果になったのか。斜向かいの人が引っ越していたのだ。



⑥ご近所には、人の面倒を見るのが好きな世話焼きさんが一定数住んでいて、要援護者に頼りにされている。

大型（10名程度の世話をしている）、中型（5名程度）、小型（1～2名）の世話焼きさんたちが、連携してご近所で活動している。世話焼きさんが活躍するのは顔の見える範囲なので、町内や校区圏域ではなく、ご近所だ。ご近所は意外や、人材の宝庫なのである。

⑦ご近所では一人暮らし高齢者同士が向こう三軒内で助け合っている。

高齢で一人暮らしと言えば、多かれ少なかれ健康などの問題があるため、同じ一人暮らしの人同士が向こう三軒内で助け合っている。ほとんどは女性だが、複数の一人暮らし女性の助け合いの輪の中に、男性が加えてもらっている場合がある。普段のおつき合いは苦手でも、何かあったら助けてもらえるから、男性は助かっている。

⑧一人暮らし女性も90歳を過ぎると、自宅にご近所の人を呼び集め、お茶会を開いている。いざという時の助け手の「貯金」をしているのだ。

支え合いマップづくりをしていると、90歳を過ぎた一人暮らしの女性宅に、周囲から数本の線が引けるから、よくわかる。そういう家を訪問してみると、数名の人がお茶を飲んでいる。買い物帰りに寄ったとか、ちょっと出かけるついでに、と言っていた。

⑨ご近所では厳密な意味での「助け合い」が行われている。ここでは一方方向の善意は好まれず、必ずお返しがなされる。双方向なのだ。

ご近所では、「ボランティア」や「サービス」といった一方通行の活動は受け入れられない。お返しの質や量は、お返しする要援護者の方が判断している。

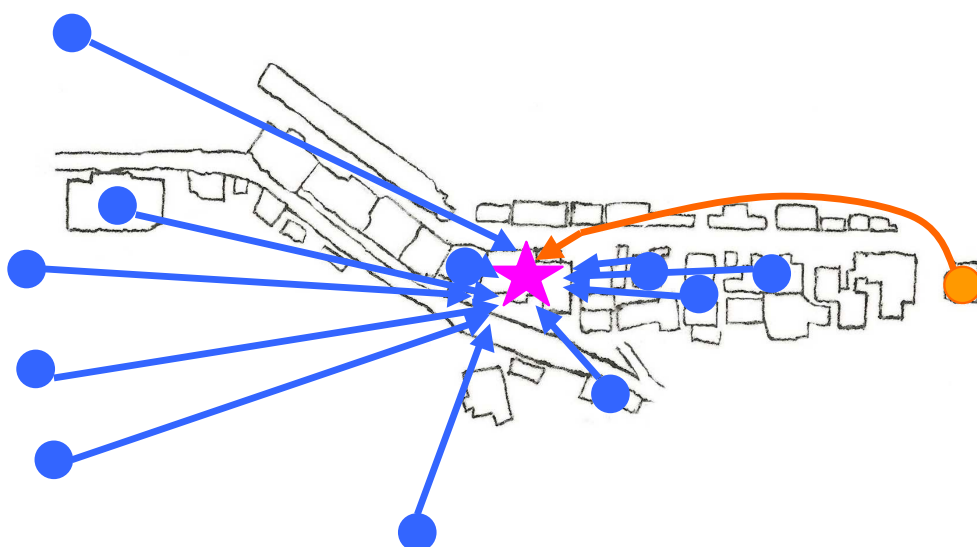
⑩人間の心の中には、貸借対照表がある。このバランスを常に平衡にしておきたいと思っている。

人から善意を受けすぎると、このバランスが崩れるから、それ以上の善意は受けられない。一人暮らしの認知症の女性がどのように日常生活を送っているのかをマップで調べた。すると、11名の人（●印）から、おすそ分けをもらったりしていることがわかった。

ところが女性は、この11名の悪口を言っているという。善意をもらっているのになぜ悪口を言うのか。では彼女が悪口を言っていない人はいないのかと聞いたら、1人いるという（●印）。その人は何をしに来ているのか。なんと、11人の人たちが持って来るおすそ分けの品を持ち帰ってしまうのだと。それだけではない。彼女をレストランや洋服店に連れ出して、支払いをさせていた。そんな人の悪口は言わないのは、なぜなのか。

彼女の心の中の貸借対照表は、11人もの人から日常的に善意の提供を受けることで、圧倒的に負債の方に傾く。これではたまらない。何らかの方法でこれを修正しなければならない。それを実現したのが、彼女に依存する人物だったのだ。

「あの人は可哀想な人でね、私が面倒を見てあげているの」という言い方をしていた。相手をサービス攻めにしてしまうと、こういう事態を引き起こすのだ。



⑪助けてもらう一方の人ほど、他人のために活動したがっている。

私たちは、要援護者のことはさておいて、担い手の方に活動の機会を提供することばかりを考えている。しかしこれは逆で、いつもサービスを受けている人こそ、活動の機会を提供するのが筋なのだ。ということは、福祉サービスの対象者にどうやって活動の機会を提供するかを、もっと真剣に考えなければならないのだ。

⑫あまりに日常的にサービスを受け続けていると、いわゆる「もらい慣れ」が生じる。サービス依存が進み、自立意欲が失せていく。

本来ならば「これはまずい」という心理が働いて、必死に自分が担い手になれるチャンスを探すのだが、その意欲も失せてしまうと、ただサービスを受ける一方の生活に慣れてしまう。デイサービスを利用するのが嫌だった人も、だんだんとサービスに慣れて、「もう一日増やしたい」ということになる。

ある老人ホームに、職員にとっては厄介な入所者がいると聞いた。いまだに自宅で生活している気分が抜けず、汚れ物も職員には渡さず、自分で洗濯しているというのである。施設としては扱いにくいかもしれないが、このように入所した後でも自立心を失わずにいることの方が、はるかに難しいのだ。

⑬ご近所は純粹に助け合いの場だから、福祉活動はすべて一対一の関係で行われる。相手をまとめてサービスするといったことは、ご近所ではない。

よくボランティアが「見守り隊」をつくってご近所の一人暮らし高齢者宅を訪問したりするが、これはご近所のルールに反するやり方だ。見守り隊というグループをつくるということは、相手を一方的なサービスの対象者と見立てて、十把ひとからげで扱うことであり、助け合いとは対極にある。

⑩ご近所が純粋な助け合いの場ということを知らずに、ご近所に活動やサービスに入る人は大抵、ご近所さんと衝突を起こしている。ご近所では助け合いのルールに従わなければうまくやっていけない。

民生委員が担当家庭を訪れる際、相手から拒否反応を受けるケースが少なくない。民生委員は、これは公的な営みなのだから、私の担当になったあなたは、私が訪問したらドアを開けるべきだと考える。しかし当人は、ご近所は私的な生活の場で、私はあなたよりもAさんに来てもらいたい、と言っている。

新任の自治会長が、就任早々、ふれあいサロンを企画したのに、思うように集まらないで怒っていた。私が公的な事業としてサロンを開くのだから、町民はそこへ来るべきだと考えている。しかし住民はやはり、ご近所は私的な生活の場で、私はそのサロンには行きたくない、と思っている。

お互いの主張は噛み合わない。ここは住民の領域なのだから、住民のルールに従うよりほかはない。

(7)助け合いはしない「おつき合い」

意外なことがわかった。日本人のおつき合いは、助け合いはしない前提で成り立っているのだ。

①日本人のおつき合いは「助け合いはしない」前提で行われている。今の段階では日本で助け合いをするのは極めて難しい。

講演会などで、以下のようなアンケートに答えてもらっている。この10項目について、「私もそうだ」と思ったら○印、そうではないと思ったら×印をつけてもらう。何年もこれ続けているが、○印が付く数は、おおむね7～8個。つまり10個のうちの多くに○印が付く。

- ①自分や自分の家族のことは隠しておきたい
- ②自分のことがご近所で噂されるのはイヤ
- ③人に助けを求めるのは苦手だ
- ④人に迷惑をかけることだけは絶対にしたくない
- ⑤人のことはなるべく詮索せんさくしないようにしている
- ⑥誰かが認知症だと気づいても、誰にも言わないようにしている
- ⑦困っている人にはお節介と言われないう程度に関わる
- ⑧引きこもるのにも事情があるから、無理にこじあけるべきでない
- ⑨お互いのプライバシーは十分に尊重し合うべきだと思う
- ⑩隣人とはあまり深入りせず、ほどほどのおつき合いを心がけている

①から④までは、あなたが困った時にどうするか。これらに○がつけば、「私が困っても放っておいて」ということ。⑤から⑧までは、困った人を見つけた時にどうするか。これらに○がつけば、「困った人がいても放っておこう」ということ。⑨と⑩はご近所づきあい。○がつけば「助け合いはしたくない」ということだ。

②なぜ日本人は「助け合いができないおつき合い」の文化を作ってしまったのか。福祉はお上がやってくれるから、庶民は差しさわりのないおつき合いをしていこうと考えたのでは？

ところが事態は急変。公的福祉だけではこの超高齢社会は乗り切れない。国も突然、「助け合いをしてほしい」と言い出した。と言っても、助け合いができる文化へつくり直すのは容易ではない。

③日本の社会に助け合いを起こすには、まず助け手が活動しやすい環境を作ることだ。詮索、お節介、こじあけを容認すること。

驚くべし、今の日本では「詮索」「お節介」「こじあけ」はみんな、悪い意味に使われている。「良くないこと」とされているのだ。この価値観を引っ繰り返さねばならない。

誰もが自分の問題を隠そうとするのだから、本気で助けたければ、詮索する以外にない。また助けを求めることができないのだから、助ける側がお節介をするより仕方がない。引きこもりの人に対しては、必要なら「こじあける」ことも必要だ。そういう積極的、攻撃的な社会を作ることが大切なのだ。

④問題を抱えたら、それをオープンにし、助けを求める。そのために人に迷惑をかけられる日本人にならねばならない。

助けを求めることは当然、相手に迷惑がかかる。ああしてほしい、こうしてほしいとお願いするのだから。それも仕方がないと割りきれぬ日本人になること。

⑤相手のプライバシーを尊重するということは、その人が困っても助けないということだ。

プライバシーを尊重するとはどういうことなのか。「あなたのことは見ないようにしてあげる。知っていることも誰にもしゃべらないから安心しなさい」と言っているようなものである。ということは、その人が困っても誰もそのことを知ら

ないのだから、助けようがない。結局、あなたを助けないということになるのである。

⑥民生委員等が対象者の守秘義務を励行するということは、結果として、その人を囲い込んで、誰にも手を触れさせない、助けさせないということになる。

民生委員の中には、守秘義務に神経質になっている人が少なくない。しかし相手の秘密を守るということは、その人のことを誰にも教えないことになる。周りの人は手の出しようがない。結果としてその人を自分の手に囲い込んで、誰にも手を触れさせないということだ。では民生委員 1 人でその人をどれだけ支え切れるのか。これからの民生委員のあり方は、当事者を支えるために必要な情報を、誰に、どれだけ開示するかが、腕の振るいのようなのだ。そのために当事者や家族を説得できれば、やりやすくなる。

⑦昔の「長屋」は助け合いにはベストの環境と言える。

人々が狭い中にひしめき合い、お互いの秘密は全部オープンになってしまう。その中には世話焼きさんも混じっているから、「私がやってあげるよ」と、あれよあれよという間に誰かに助けられてしまう。こうなると、助けられ上手になる努力などはあまり必要がない。環境そのものが、助け合いを実践させてしまうからだ。

(8)サービスと助け合いは対極に

「サービス」と「助け合い」、似た者同士に見えるが、じつは両者は正反対なのだ。

①人々は福祉サービスも、助け合いの一環だと思い込んでいる。一方的にサービスを受けることに耐えられないでいる。

関係者は、サービスを提供したら、相手は喜ぶだろうと考えている。しかし住民はただ一方的に善意を提供されて、お返しができないことに戸惑っている。

デイサービスの職員が新聞に投書していた。利用者の女性の愚痴が聞こえた。「毎日、『すまん、すまん』と言うのにくたびれたと。そこで彼女は翌日、自分の赤ん坊をデイへ連れて来て、先ほどの女性に「この子の面倒を見てね」。女性が喜んだのは言うまでもない。

②サービス施設で自分が担い手になれると思ったら、利用者は満足する。

とにかく、される一方の関係はたまらない。福祉は助け合いだという思いは消えないのだ。よくある話だが、妻が夫をデイサービスに連れ出そうとすると、嫌がる。どうしたら行ってくれるのかと妻が聞くと、「俺がボランティアするのなら(行く)」と答える。

③サービスの施設で、自分はサービスを受けていないのだと思える構図なら満足する。

東京にこんなデイサービスセンターがあるという。看板に「工務店」とある。利用者は「社員」。各自作業服を着て、会社に出勤。そこでガチャン。タイムカードを押す。「〇〇さん、今日は××保育園へ行って、△△の修理をお願い。「あいよ、引き受けた」となる。自分はサービスを受けているのではない、と思える仕掛けになっている。

④「自分は福祉サービスの現場にいるわけではない」と思えば、もっといい。

新聞にこれなら利用したいデイサービスという記事があった。どうして利用したいのか。サービスを選択できるだという。今日は工芸、今日は絵手紙と。要するにお楽しみを選択できるのだと。カルチャーセンターまがいのサービス。それならば、何もデイサービスセンターに行くまでもない。本物のカルチャーセンターに行ければいい。そこが要介護者も受け入れてくれればいいのだ。そのやり方のメリットは、「私は福祉サービスは受けていない」と思えることにある。

⑤自分は担い手の側なのだと思います。実際に担い手の活動をすることで「治療」効果が出てくる。

大分県にある老人ホームが在宅の認知症高齢者の訪問活動で、同じ認知症の入所者を同道した。在宅者が同じ話を繰り返しても、「それは初耳」となり、会話はいつまでも続く。「今日はおんたが来るから押し入れから出してくれた」と言えば、「おんたはまだいい方だよ。私なんか施設に入れられちゃった」。これには職員がびっくり。「正常」に戻っているじゃないか！ 本人にこれほど劇的な治療効果があるのだから、これからも認知症の人を連れて行こうということになった。入所者への治療効果を狙いたければ、本人を担い手の側に据えることが最善なのだ。